

47行の物語

47都道府県シナリオコンクール

2月から11月までの月間最優秀賞をお読みいただき、年間最優秀作品を1作品お選びください。Web及び投票箱にて投票できます。

投票は、**3/31（土）～4/7（土）20時まで**となります。

投票はこちらから <https://goo.gl/forms/Ag48BbVHG0kNV0M62>

（3/31以降、Googleの投稿フォームに遷移します）

2月月間最優秀作 『あご出汁の味噌汁』小檜山 長代（対象地区：九州・沖縄）

3月月間最優秀作 『はれの日の朝』有坂 尚子（対象地区：東北）

4月月間最優秀作 『マモル』山下エリカ（対象地区：東京）

5月月間最優秀賞 『かかの醤油おこわ』田中理恵（対象地区：北陸・甲信越）

6月月間最優秀賞 『ふくの料理』横内 治（対象地区：中国地方）

7月月間最優秀賞 『酪農一家のイクラ丼』三浦優子（対象地区：北海道）

8月月間最優秀賞 『小正月』北辻 類（対象地区：近畿）

9月月間最優秀賞 『正しい帽子パンの食べ方』朱花かの子さん（対象地区：四国）

10月月間最優秀賞 『似たもの同士』萩原幸子さん（対象地区：東海）

11月月間最優秀賞 『抑えきれない郷土愛』西出拓也（対象地区：関東 東京を除く）

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい

47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円＋副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円＋月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆2月 九州・沖縄地区の審査結果発表☆☆☆

審査経過

2月25日に締め切られた第1回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール（対象地区：九州・沖縄）は、応募総数217編を集めた。

対象地区別の内訳は福岡58編、佐賀6編、長崎16編、熊本20編、大分16編、宮崎12編、鹿児島23編、沖縄63編、不明3編であった。その中から左記の12編が最終審査に進んだ。最終審査はシナリオ・センター出身で、九州出身のシナリオライター、柏田道夫氏が行い、

審査結果発表

★2月月間最優秀作

長崎県平戸市

『あご出汁の味噌汁』小檜山 長代

●最終審査候補作品12編

（カッコ内は採り上げた地域名）

『カジフチの夜』（沖縄）

大槻 聡

『タコのスミに染まるまで』（沖縄）

美 苗

『閉めの一杯』（福岡）

安立 真梨

『変身ナーベラー』（沖縄）

岡部 法香

『しりしりの音』（沖縄）

遠藤 政孝

『エアーじんだ煮』（福岡）

たぬきたぬこ

『豚でも騎士』（宮崎）

千葉 亜紀

『こころ残り、めんたい残し』（福岡）

宮寺 信之

『あご出汁の味噌汁』（長崎）

小檜山長代

『夏は冷や汁』（宮崎）

朝宮 馨

『なんくるないさ』（沖縄）

常楽 雛子

『がめ煮の花人参』（福岡）

小泉理恵子

（以上順不同・敬称略）

最優秀作1編が選出された。
最優秀作を掲載すると共に、柏田道夫氏の審査評も掲載する。

なお3月25日に締め切られた「東北地区」の審査（最終審査員は山形出身のあべ美佳氏）は5月28日に発行となる弊誌6月号誌上にて発表される。

最終審査評

「47行の物語・ごはん&九州・沖縄地区」

風景と人物が

そのまま味噌汁の味わいに

柏田道夫

（シナリオライター／シナリオ・センター講師）

最終に残った12編はそれぞれのおもしろさでしたが、突出した作品はなく迷いました。

沖縄が5作（ナーベランブシー、人参しりしり、タコ、黒牛の握り、タコライス）で、福岡4作（じんだ煮、豚骨ラーメン、めんたいこ、がめ煮）、宮崎2作（黒豚、冷や汁）で、最優秀に選んだ長崎が1作でした。

凝った設定作もあったのですが、ある意味一番オーソドックスな父と娘の『あご出汁の味噌汁』を最優秀に選びました。平戸弁の素朴さ、風景と人物がそのまま味噌汁の味わいとなってかもし出されている。

次点は『カジフチの夜』（雰囲気はいいが「カジフチ」という方言の意味を分からせたい）と、『閉めの一杯』（設定はいいが、高校生カッパルの使い方がイマイチ）。

若干気になったのは、主人公とからむ脇が、いわゆる便利キャラになっただけ、ゆえの長めの説明セリフ化していました。これから応募される方は参考にしてください。

最優秀賞

あご出汁の味噌汁

小檜山 長代

(作家集団L)



〈人物〉

青崎 悟 (55)

青崎日葵 (28)

○平戸市前津吉港 (早朝)

朝焼けの海。漁船が沖から帰ってくる。

T・長崎県平戸市

色黒で無骨な漁師、青崎悟 (55) が漁船から降りてくる。

○青崎家・ダイニング (朝)

朝食中の悟と青崎日葵 (28)。

日葵「味噌汁用の焼きあごはあの棚にあるけん、夜のうち鍋に入れて出汁とることね」

悟「ああ」

日葵「あごの獲れたら加工して送ってよ。焼きあごは平戸しかなかやろね」

悟「ああ」

日葵「東京の住所わかつとるよね？ 味噌汁は母さん伝授のあご出汁じゃなからんばダメとけんさ」

悟「……あのな、日葵」

と何か言いたそうにするが、紛らわすように慌てて味噌汁をすすする。

悟「(こくりと頷き) あのな……」

と、箸を置き何か言いたそうにする。日葵「わかつとるよ、言いたかこと……」

悟「えっ？」

日葵「私がもらい子だったこと」

悟、驚く。

悟「いつから知った？」

日葵「……母さんのお葬式の時……麻子おばちゃんが話してたのを偶然聞いて……」

悟「……すまんやったな」

日葵「父さんは自分の娘と思って育ててくれたやろ？」

悟「当たり前たい。大事な一人娘やもん」

日葵「だけん、血が繋がつたらんことは全然気にならんかった」

悟「(声を詰まらせ) 明日から寂しくなるな」

日葵「父さん、今までありがとうね」

悟、味噌汁を飲み干す。

悟「日葵の味噌汁は母さんと同じ味ばい」

日葵「母さんの味、父さんのこと、絶対に忘れんよ」

悟「あご、いっぱい獲って送ってやるけん」

頷く日葵の目に涙が光る。

○海

悟の漁船が走っている。

トビウオがぴょんと飛び跳ねる。

〈終〉

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい



47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円＋副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円＋月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆ 3月 東北地区の審査結果発表 ☆☆☆

審査経過

3月25日に締め切られた第2回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール（対象地区：九州・沖縄）は、応募総数263編を集めた。

県別の内訳は青森48編、岩手29編、秋田45編、宮城44編、山形42編、福島41編、不明14編であった。

その中から左記の12編が最終審査に進んだ。最終審査はシナリオ・センター出身で、山形県出身の作家でシナリオライターのあべ美佳

審査結果発表

★3月の月間最優秀作

福島県

『はれの日の朝』

有坂 尚子

●最終審査候補作品12編

（カッコ内は採り上げた地域名）

『真っ赤っか』（宮城）

足立 聡

『ぼくのうみ』（宮城）

阿部 達人

『幸せにしまったみに』（秋田）

阿部 理人

『芋煮会議』（山形）

遠藤 政孝

『離れた人の味』（山形）

小浦 花織

『入れるんですか、ウニ』（青森）

鹿野 純一

『返品』（福島）

田中 啓太

『遠くへ、もっと遠くまで』（福島）

時乃 真帆

『四十九日の献立』（秋田）

山口 亜紀

『はれの日の朝』（福島）

有坂 尚子

『お父さんの味』（岩手）

山本 奈奈

『鶴への恩返し』（山形）

渡邊 渚

（以上順不同・敬称略）

最終審査評

氏が行い、最優秀作1編が選出された。最優秀作を掲載すると共に、あべ氏の審査評も掲載する。
なお4月22日に締め切られた「東京地区」の審査（最終審査員は東京都出身の寺田敏雄氏）は6月28日に発行となる弊誌7月号誌上にて発表される。

「47行の物語・ごはん&東北地区」
その先の希望が確かにあった

あべ美佳（作家シナリオライター）

3・11絡みの作品がたくさん来ることは覚悟していました。あの日から6年経っても、悲しみも、怒りも、消えることはありません。ですが、受賞作にはその先の「希望」が確かにありました。しかも一切、3・11に関するセリフは出てきません。今の生活も、過去に何があったかも、すべて小道具で表現しています。見事です。つつましく、たくましく、生きている姉弟の姿が、「こづゆ」という食べ物に重なり、姉弟の笑顔が目に見え……そんな素敵な作品でした。

私には会津の友人がいます。作品に登場する「こづゆ」という決して豪華じゃない汁物が、正月や冠婚葬祭などのハレの席で、なぜ振る舞われるのか。その理由を聞いて、感動したことを覚えています。

「豪華なものを用意できませんが、この地域でも手に入るもので、手間暇かけて作りました。どうぞ、いっぱいおかわりしてくださいね」被災されたすべての方々、この姉弟のように幸せでありますように。

最優秀賞

はれの日の朝

有坂 尚子

(作家集団F)



〈人物〉

古館篤志 (18) 高校3年生

古館真優 (24) 篤志の姉

○古いアパートメント・外観(朝)

晴れやかな空。うぐいすの鳴き声が聞こえる。

○同・篤志と真優の部屋・台所(朝)

室内は2Kの造り。古館篤志 (18) がスウェット姿で料理している。作っているのは汁物。左の部屋からパジャマ姿の古館真優 (24) が出てくる。

真優「おはよ」

篤志「おはよう」

真優「何作ってんの？」

篤志「んー、うん。もうすぐ出来るから」

真優「ふーん？」

篤志、汁椀によそっている。用意された椀は四つ。真優、椀の中身(豆麩、人参、椎茸、里芋、木耳、糸こんにゃく)を見て、

真優「あ、これ、もしかしてこづゆ？」

篤志「うん、そう。父さんと母さんの分もよそったから」

真優「はいはい」

真優、二つの汁椀を持って、右の部屋

に入る。リビング兼篤志が寝起きしている部屋。壁に真新しいスーツ、Yシャツ、ネクタイが掛かっている。カラーボックスの上に、泥の汚れとふやけが少し残る古い家族写真が飾ってある。

その前に椀を二つ供える。

真優「お父さん、お母さん、篤志が作ったよ」

篤志、残りの椀二つを持ってくる。二人でこたつに入る。

真優・篤志「(同時に) いただきます」

真優、汁を飲み、

真優「お母さんの味にはまだまだ遠いけど、でも、ちゃんと貝柱の味出てて美味しい」

篤志「そう。なら良かった」

真優「ねえ、これわざわざ材料揃えてくれたの？」

篤志「まあ……母さんならそうすると思って」

真優「篤志……」

篤志「姉ちゃん」

真優「うん？」

篤志「結婚、おめでとう」

真優、篤志を見る。篤志、真優を真っすぐ見つめて、

篤志「あの日から今日までずっと、側にいてくれて、ありがとう」

窓から入る柔らかな陽が二人の顔を照らしている。

〈終〉

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい

47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円＋副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円＋月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆4月 東京地区の審査結果発表☆☆☆

審査経過

4月22日に締め切られた第3回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール（対象地区：東京地区）は、応募総数233編を集めた。

その中から左記の12編が最終審査に進んだ。12編で採り上げられているネタは、寿司、もんじゃ、深川めし、海苔の佃煮、オムライス、ちくわぶ（おでん）、東京ばな奈であった。最終審査はシナリオ・センター出身で、東京都出身のシナリオライター、寺田敏雄氏が行

審査結果発表

★4月月間最優秀作

『マモル』

山下 エリカ

●最終審査候補作品12編

『鶴は千年、亀は万年』

磯野 洋子

『だって江戸前な父だもの』

井上 エレン

『アオヤギ』

奥山 恵子

『大阪で生まれた女』

くずのようこ

『東京土産』

小峰 貴之

『二枚貝』

三枝 伸也

『しあわせのオムライス』

佐藤 宏美

『恋の良薬は口に美味し』

萩原 幸子

『ちくわぶの教え』

藪原 祐子

『マモル』

山下 エリカ

『最後の晚餐』

山久 友

『もんじゃ男』

横山 緋沙子

（以上五十音順 敬称略）

い、最優秀作1編が選出された。最優秀作を掲載すると共に、寺田氏の審査評も掲載する。

なお5月27日に締め切られた「北陸甲信越地区」の審査（最終審査員は新潟県出身の松田裕子氏）は7月28日に発行となる弊誌8月号誌上にて発表される。

最終審査評

「47行の物語：ごはん＆東京地区」

自然でリアルなワンシーン

寺田敏雄（シナリオライター）

もんじゃを焼きながらの、夫婦の何気ない会話。「いいんじゃない？」「そんなもんでしょ」等、もんじゃを焼く過程と二人の会話内容をダブルミーニングにしているところが心地よく、粹で、こういうの好きです。

崩れそうになったもんじゃの土手を夫婦で力合わせて守ろうとしているラスト。この夫婦は大丈夫、何だかんだ言って、これからもきつとしっかりと繋がっていくよ、という微笑ましい希望も見えて、後味もよいです。

技術的にも、ワンシーンだけの会話劇で成立させ、登場人物も2人に絞ったシンプルなシチュエーションにしたところに、好感を持ちました。他の候補作に散見された、題材への苦し紛れのこじつけ感もなく、いい意味でそのへんにいそうな人間の、自然でリアルなワンシーンとして成立している作品だと思います。

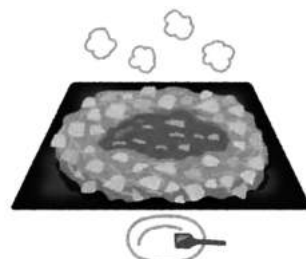
最優秀以外に選んだ上位作品は『東京土産』、『だって江戸前な父だもの』、『ちくわぶの教え』、『もんじゃ男』の4編です。

最優秀賞

マモル

山下 エリカ

(研修科ZL)



〈人物〉

野上奏汰 (28) 会社員

野上律子 (29) 奏汰の妻

○もんじゃ焼き屋『ひさし』・外観(夕)

入口に、風にはためく『もんじゃひさし』の古い暖簾。

○同・中(夕)

古く、こじんまりとしている店内。

数組の客と店員が二人。

テーブル席に向かい合い座っている野上奏汰 (28) と野上律子 (29)。

奏汰と律子の左手薬指に、お揃いの結婚指輪。

コテで鉄板に油を引く奏汰、上目使いで律子を盗み見る。

奏汰の視線を逸らす律子、具材を鉄板に載せる。

奏汰「まだ怒ってんの？」

奏汰を睨む律子。

奏汰「仕方ないじゃん」

律子「焦げる」

奏汰「あ、ごめん」

両手のコテで、具材を混ぜ、刻む奏汰。

奏汰「部長の誘いは断れないよ……」

ゆっくり生地を混ぜる律子。

奏汰「来年の結婚記念日は、何があっても絶対に帰って来るからさ……」

じつと奏汰を見る律子。

ゴクツと唾を飲む奏汰。

律子「いいんじゃない」

奏汰「え？」

声が裏返る奏汰。

律子「そろそろ土手作っても」

奏汰「あ、ああ……」

土手を作る奏汰、律子を盗み見る。

律子「そこ、薄くない？」

奏汰「あ、ああ……本当だ」

鉄板に顔を近づけ、土手を整える奏汰。

奏汰の様子を見詰めている律子。

真剣な表情の奏汰、額に汗が浮かぶ。

唇をギュッと結び、溜息をする律子。

律子「そんなもんでしょ」

奏汰「そう？ いいかな？」

律子「うん。行くよ」

奏汰「よし。守備はまかせとけ！」

土手の真ん中に生地を流し入れる律子。

律子側の土手から生地が流れ出る。

奏汰が慌てて押さえるが、コテの脇から生地が流れ出る。

奏汰「ヤバイー」

ハガシ二枚でコテの脇を押さえる律子。

目が合う蒼太と律子、はにかむ。〈終〉

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい

47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円＋副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円＋月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆ 5月 北陸甲信越の審査結果発表 ☆☆☆

審査経過

5月27日に締め切られた第4回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール（対象地区：北陸甲信越）は、応募総数198編を集めた。

採り上げられている県別の本数は、長野県45編、新潟県47編、山梨県30編、石川県22編、富山県25編、福井県19編で、その中から左記の12編が最終審査に進んだ。

審査結果発表

★5月の月間最優秀作

新潟県

『かかの醤油おこわ』 田中 理恵

●最終審査候補作品12編

（カッコ内は採り上げた地域名）

『蕎麦が食べたい』（長野）

穴沢 拓美

『崖の上の芋』（福井）

有坂 尚子

『煮つけの和代』（新潟）

大杉誠志郎

『善光寺のおやき』（長野）

小檜山長代

『毒の珍味』（石川）

杉田 鮎美

『ブルーストのいない午後』（長野）

竹田 行人

『かかの醤油おこわ』（新潟）

田中 理恵

『甘々娘』（山梨）

寺田 大作

『ももえちゃん』（新潟）

前田由紀子

『あまもつくら』（長野）

みやさかじゅん

『陣中見舞い申し上げます』（山梨）

山田 圭奈

『そばマスター』（長野）

横内 治

最終審査はシナリオ・センター出身で、新潟県出身のシナリオライター松田裕子氏が行い、最優秀作1編が選出された。

最優秀作を掲載すると共に、松田氏の審査

評も掲載する。

なお6月24日に締め切られた「中国地方」の審査（最終審査員は吉田玲子氏）は8月28日に発行となる弊誌9月号誌上にて発表される。

最終審査評

「47行の物語・ごはん＆北陸甲信越」
自然と光景が目につく

松田裕子（シナリオライター）

ワンシーンの中で、関係性や現状が、説明台詞ではなく、母子2人の会話の中でしっかりと表現されていたので、自然と光景が目につくことができました。キャラクターも伝わってきたので、それぞれの心情に入りやすかったです。言いたいことが言えないけどわかりあっている母子のやさしくてせつないやりとりでラストはじーんとくるものがありました。

お題をきちんと組み込んで、方言を使ったやりとりも効果的だったと思います。

おこわが食べたくなりました。

最優秀以外に選んだ上位作品は『陣中見舞い申し上げます』、『煮つけの和代』、『ブルーストのいない午後』、『そばマスター』の4編です。

最優秀賞

かかの醤油おこわ

田中 理恵

(通信作家集団)



〈人物〉

上条詩織 (25)

上条咲子 (53) 詩織の母

○下條家・居間(夜)

和室の卓袱台で向かい合って食事している上条詩織(25)と上条咲子(53)。食卓にはくじら汁や蒸かし茄子などが並べられている。

詩織、お椀に盛られた醤油赤飯を食べ、詩織「うんめー」

美味しそうに微笑む。

咲子「詩織、新潟弁でてる。氣いつけなさい」
詩織「だって、かかの醤油おこわ、うめえんだもの」

咲子「あちらさんは皆さん、東京生まれなんでしょ。詩織も早く慣れないと」

詩織「わかってる。明日からは氣いつけるよ」
部屋の奥に花嫁衣裳の白無垢と黒留袖が掛けられている。

詩織「ねえ、東京の赤飯は味がないんでしょ」
咲子「薄味だね」

詩織、箸で赤飯の金時豆をつまむ。

詩織「豆もちっちゃいでしょ」

咲子「これよりかは、小さいね」

詩織、つまんだ豆を食べる。

咲子「かかがこの家に嫁に来た日に最初に食

べた御飯が、この醤油おこわだったんだよ」

詩織、咲子を見つめる。

咲子「ばーばが『これがうちの赤飯だ』て言っ
て作ってくれてね。初めて見たからびつ
りした。茶色いのに赤飯なの?て」

詩織「確かに茶色いよね」

咲子「それに、醤油味だってわからなかった
から、ごま塩かけすぎちゃってね。しょ
っぱかったな」

懐かしそうに笑う咲子。

詩織「ねえ、実家のお赤飯を食べたくならな
かった?」

咲子「ん……、それどころじゃなかったかな。
新しい味を覚えるので必死だったから」

詩織、醤油赤飯をじっと見つめる。

詩織「作り方、ちゃんと教わっておけばよかつ
た」

咲子「あちらのお母さんに東京の味を教えて
もらいなさい」

詩織「そうだね……」

詩織、赤飯を口に運び、ゆっくり味わう。

詩織「かかの醤油おこわはホントにうめえな」

寂しさを噛みしめる詩織。

咲子「食べたくなったら、帰っておいで。い
つでも作って待ってるから」

咲子も涙をこらえ、赤飯を口に運ぶ。

〈終〉

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい

47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円＋副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円＋月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆6月 中国地方の審査結果発表☆☆☆

審査経過

6月24日に締め切られた第5回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール（対象地区：中国地方）は、応募総数164編を集めた。

その中から左記の12編が最終審査に進んだ。採り上げられている県別の本数は、山口県27編、島根県28編、鳥取県13編、岡山県31編、広島県60編、不明5編であった。

最終審査はシナリオ・センター出身で、広島県出身の作家でシナリオライターの吉田玲

審査結果発表

★6月月間最優秀作

『ふくの料理』

横内 治

●最終審査候補作品12編

『山賊への慕情』

大杉誠志郎

『たいがたいおなごら』

落合香緒里

『知恵寿司』

木村 圭吾

『でええ美味い、伝えたい味、デミカツ丼』

児島 正樹

『とめどなく』

汐田 操

『好きも嫌いも』

杉田 鮎美

『すっぱい恋の物語』

蒼汰れいじ

『もっかい会いたいなあ』

高橋 呂美

『卵ごはんにくれたもの』

水野祐三子

『母と見習い母』

山崎 幸子

『ふくの料理』

横内 治

『ばいばいバラパン』

若山 翠水

（以上五十音順 敬称略）

子氏が行い、最優秀作1編が選出された。最優秀作を掲載すると共に、吉田氏の審査評も掲載する。

なお7月28日に締め切られた「北海道」の審査（最終審査員は北海道出身の山本むつみ氏）は9月28日に発行となる弊誌10月号誌上にて発表される。

最終審査評

「47行の物語：ごはん&中国地方」

作品づくりと料理づくりは似ている

吉田玲子（シナリオライター）

最優秀賞に選ばせていただいた『ふくの料理』は「技」を感じた一品です。短いながら登場人物の状況や感情がよくわかり、完成度が高い！と思いました。女店主がふくの食べ方で相手を読み解く……という会話の運びも巧い。説明セリフになり過ぎず、これだけの情報が提示できるのは、すばらしいです。

さりげないユーモアも効いていて、人情味を感じられ、後味もよかったです。オチも計算されていていました。皆様の書かれたものを拝見しながら、作品づくりと料理づくりはどこか似ているな……と感じ入りました。

誰に食べさせたいか。それはどんな材料を使うのか。どう調理するのか。その人なりの工夫はあるのか。味付けは甘いのか辛いのか。どんな後味を残したいか。

これからもたくさんおいしい料理……じゃなくて、作品を作って腕を磨いてください！

最優秀作以外に選んだ上位作品は、『山賊への慕情』、『好きも嫌いも』、『ばいばいバラパン』、『知恵寿司』の4編です。

最優秀賞

ふくの料理

横内 治

(作家集団Q)



〈人物〉

阿倍富久夫(26) ふぐ料理人

武井 福江(45) ふぐ料理店の女店主

○小料理屋・福ふく・全景(夜)

看板にふぐの絵と「ふく」と書いてある小さな料理屋。

○同・中(夕)

カウンターに座り、ふぐの刺身を内側から2、3枚とって食べ、ひれ酒を飲む阿倍富久夫(26)、ため息をつく。

阿倍「すみません、ふぐのひれ酒、お代わりをお願いします。あと、雑炊を」

上手そうに息を吐く阿倍、鞆から封筒を出し、「ふぐ調理師試験 不合格」とある紙を見て、苦い顔で元通りしもう。カウンターにやってくる板前姿の武井福江(45)、阿倍のひれ酒を足す。

頭を軽く下げ、ふぐ刺しを食べる阿倍。阿倍をちらつと見る福江、刺身を切る。

福江「このあたりの方ですか」

阿倍「え、はい……わかりますか」

奏汰「お刺身の食べ方、慣れていない人は外側から食べるんです。あとふぐのひれ酒で」

阿倍「ふぐのひれ酒？」

福江「ふくって関東では言いせんから」

阿倍「本場、下関のふくはやっぱり違うな」と盛り付けをしながら微笑む福江。

福江「でも、こっちのふぐの料理人が関東で試験受けて落ちる事もあるそうですよ」

「こっくん」とひれ酒を飲む阿倍。

福江「ふぐの試験は都道府県単位で。こっちは生産地ですから早く捌くのがポイントですけど、関東は見た目も大事なので。基準が違いますよね。お待たせしました」

雑炊を阿倍の前に置く福江。

雑炊をふーっと冷まし口にする阿倍。

阿倍「旨い……ふぐの旨味が出て優しい味です」

福江「有難うございます。……大丈夫ですよ」

阿倍「大丈夫って」

福江「この雑炊の味がわかる人ならきつとくまうきます。『ふく』が来ますよ」

きよとんとしつ、笑顔で食べる阿倍。

× × ×

笑顔で出ていく阿倍に頭を下げる福江、扉が閉まると、電話をかける。

福江「親方ですか……ええ、息子さん、うちの

店に来ました。私の顔は忘れていたようです。修行していたの20年以上前ですからね……

家を出た事許してあげたらいかがですか？」

○同・外・通り(夜)

海沿いの道を笑顔で歩く阿倍。

〈終〉

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい

47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円＋副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円＋月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆ 7月 北海道地区の審査結果発表 ☆☆☆

審査経過

7月22日に締め切られた第6回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール（対象地区：北海道地区）は、応募総数184編を集めた。

その中から左記の12編が最終審査に進んだ。最終審査はシナリオ・センター出身で、北海道出身のシナリオライター山本むつみ氏が行い、最優秀作1編が選出された。最優秀作を掲載すると共に、山本氏の審査評も掲載する。

審査結果発表

★7月の月間最優秀作

『酪農一家のイクラ丼』三浦優子

●最終審査候補作品12編

（カッコ内は採り上げたごはん）

『カモメの恩返し？』(サンマ)	秋山 紀勝
『しよっぱくないシャケ』(紅鮭)	植木百合子
『夏の渡り鳥』(ジンギスカン)	鬼武 桂子
『かもめが戻る日』(ごはん粒)	上村奈々子
『ちゃんと』(鮭のちゃんちゃん焼き)	小峰 貴之
『親父の味』(鮭のちゃんちゃん焼き)	土崎 こう
『豆パンとアンパン』(豆パン)	西田 桂
『やきそば弁当の夜』(やきそば)	羽山 実里
『赤くて甘い』(甘納豆の赤飯握り)	松浦久美子
『酪農一家のイクラ丼』(イクラ)	三浦 優子
『迷えるラムチョップ』(ラムチョップ)	

『蟹どんぶり』(カニ)

水元久美子
和田 充裕

(以上五十音順 敬称略)

最終審査評

なお8月26日に締め切られた「近畿地方」の審査（最終審査員は大阪出身の森下直氏）は10月28日発行の弊誌11月号誌上で発表する。

「47行の物語：ごはん&北陸甲信越」

『動』の芝居でキャラを生き生きと

山本むつみ（シナリオライター）

わずか47行のシナリオで、冒頭を延々と状況説明に費やすのはもったいない話です。受賞作の初っ端は、「父子げんか」からの「家出」。日常によくある微笑ましい諍いではあります。物語はのっけから勢いよく展開していきます。二人だけの動かない会話劇が「静」だとすれば（最終候補作はこちらが多かった）、これは「動」。台詞だけでなく、それぞれの行動で、キャラクターを生き生きと描き出しているところが見事です。

ガラス窓一枚隔てて、外は果てしない雪原、中は温かいご飯が湯気を立てる食卓……この対比が実に北海道的で、映像で見てもたくなりました。父と息子二人だけでも成り立つ話ですが、5歳の妹を絡ませることで、より一層味のある面白い物語になっています。そして何より、作中に登場する「バターご飯のイクラ丼」の美味しそうなこと！

最優秀賞以外の上位作品は、『赤くて甘い』『カモメの恩返し？』『しよっぱくないシャケ』『ちゃんと』の4篇でした。

最優秀賞

酪農一家のイクラ丼

三浦 優子

(通信本科)



〈人物〉

岡田 満(40) 酪農家

岡田 徹(10) 満の息子

岡田 花(5) 満の娘

○岡田家・キッチン(夕)

岡田満(40)と岡田徹(10)が対峙して立ち、岡田花(5)が徹の袖をひっぱっている。

岡田「スマホなんかまだいらないうべ。そんなもんは大きくなって自分で買えや」

徹「俺のことなんか父さん考えてないんだ!」
憤り、花を振り放して部屋を飛び出す徹。

花「父さん、お兄ちゃん家出しちゃったよ!」

岡田「花、時計の長い方の針は今、12の所だろう? あれが6になる前に徹が帰って来たら、いくじなして笑ってやれ」

岡田は冷蔵庫から鮭一匹を取り出す。

○同・庭(夕)

徹は雪の轍を歩いて門まで行き、見渡す。果てしない雪原野が広がっている。

○同・キッチン(夕)

岡田は鮭の腹を切り、筋子を出す。調理の合間に窓から外を見る岡田。

○同・庭(夕)

家に向かう徹。窓の岡田、花と目が合う徹。徹は雪を蹴り上げ再び歩き去る。

○同・牛舎・内(夕)

バケツをひっくり返して座る徹。

○同・キッチン(日没後)

岡田は台所に立ち、自家製らしい無骨な形のバターを切っている。

玄関の開く音。時計を見る花。

花「お兄ちゃん! 頑張ったね! 7の所だよ!」
おずおずとキッチンに入って来る徹。

徹の様子を見る岡田。

岡田「寒かったら? 飯だぞ」

花、岡田、徹が食卓に着く。卓上にはイクラ、バター、湯気立つご飯。コップにはホットミルク。岡田、花、徹は

それぞれご飯にバターを載せ醤油をかける。バターがご飯に流れ出す。その上にイクラをかける。真っ赤になる丼。

岡田・花・徹「いただきます!」

徹はぼそぼそ食べ始め、次第にもりもりと食べ出す。徹は元氣よく、

徹「家出は雪がとけてからにする!」

岡田「春はなあ、腹すかせた熊が出るぞお!」

徹と目が合い、ニタリと笑う岡田。(終)

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい

47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円+副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円+月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆ 8月 近畿地区の審査結果発表 ☆☆☆

審査経過

8月25日に締め切られた第7回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール（近畿地区）は、応募総数165編（大阪府60編 京都府31編 和歌山10編 奈良県9編 滋賀県16編 兵庫県26編 不明10編、他県3編）。その中から次の12編が最終審査に進んだ。

最終審査はシナリオ・センター出身で、大阪府出身のシナリオライター森下直氏が行い、最優秀作1編が選出された。最優秀作を掲載

審査結果発表

★8月の月間最優秀作

『小正月』

北辻 類

●最終審査候補作品12編

（カッコ内は採り上げたごはん）

『始まりのお番菜』お番菜

岡野 彩希

『やっぱりタコか、タコなんか』タコ飯

梶 佳織

『小正月』小豆粥

北辻 類

『富貴ダシに在り』にゅうめん

斎部まり乃

『黒豆のころ』黒豆

広富ひとみ

『ふたりの時間』柿の葉寿司

水野祐三子

『僕の気持ちを形にしたら』お好み焼き

三谷 武史

『肉吸いオバチャン』肉吸い

宮崎 和彦

『うちのめはりずし』めはりずし

森 久里

『京のお出汁を味わって』昆布出し

山崎智香子

『シカたなく、サヨナラ』奈良漬

山久 友

『お好み定食』お好み焼きと白飯

横内 治

（以上五十音順 敬称略）

すると共に、森下氏の審査評も掲載する。

なお9月25日に締め切られた「四国地区」の審査（最終審査員は香川県出身の浜田秀哉氏）は11月28日発行の12月号誌上で発表する。

最終審査評

「47行の物語・ごはん&近畿」

映像が浮かぶかどうか

森下 直（シナリオライター）

脚本はいうまでもなく、映像が浮かぶかどうか。その映像が、どんな心情を観客や視聴者に伝えているか、が大切。これは「行間の深み」という言い方をしたりします。最終選考に残った作品は力作揃いでしたが、近畿地区での最優秀賞は、『小正月』（北辻類さん作）にさせていただきます。

最優秀賞として最後まで悩んだのは『お好み定食』（横内治さん作）でした。短い中にドンデンがあるのは『お好み定食』でしたが、台詞によってすべてを説明しているところが残念でした。対照的に『小正月』は行間が深く、親子の情愛を、小豆粥、沢庵の刻み、積雪で描写し、ちゃんとこちらに伝わった筆力が秀逸。冬の寒さ、室内の温かさ、小豆粥の湯気が感じられ、古き伝統を繋いでいるごく普通の家族、という視点がお見事でした。読んで心がほっこりしました。北辻さん、おめでとうございます。

最優秀賞以外で上位に挙げたのは『お好み定食』『うちのめはりずし』『僕の気持ちを形にしたら』『肉吸いオバチャン』の4編でした。

最優秀賞

小正月

北辻 類

(130 期作家養成講座)



〈人物〉

高橋真紀 (36) 主婦

高橋真子 (11) 真紀の娘

○高橋家・台所 (朝)

高橋真紀 (36) が包丁を持ってたくわんを細長く刻んでいる。温めている鍋が噴き、真紀は慌てて火を止める。鍋のふたをとり、おたまで小豆粥かきまぜてすくい、器に盛りつける。

○同・真子の部屋 (朝)

ベッドで高橋真子 (11) が寝ている。仏壇の鈴が鳴る音が聞こえる。真子は目を開けるが、目を閉じてもう一度寝る。

○同・庭

雪が降っている。庭木にどんどん雪が降り積もっていく。

○同・真子の部屋

真子はベッドに座り、お盆を布団の上にのせ、小豆粥の器を手にとる。真紀はベッドのそばのいすに座っている。

真子「今日ってとんど焼きなん?」

真紀「そうやで」

真子は小豆粥を食べようとすると、熱すぎてすくったスプーンをふーふーし

ながら、

真子「だから小豆粥なん?」

真子は小豆粥を食べる。

真子「うち、小豆粥好きやねん」

真紀「そうなんや、知らなかった」

真子は小豆粥をおいしそうに食べる。

○同・庭

停めてある真子の自転車サドルに雪が積もっている。

○同・真子の部屋

真子はベッドに座り、小豆粥を食べる。

真紀はベッドのそばのいすに座る。

真子「小豆粥ってさ、なんで1月15日にしか

食べへんの?」

真紀「なんでやろな」

真子「小学生になったらさ、1月15日って平

日やし学校に行ってるやん。もう何年も小

豆粥を食べられへんかったからうれしい」

真紀「そうなんや。あんた、はよ風邪治して

合唱の練習しーや。もう余裕ないで」

真子「はい」

真子はカリカリと音を立てながら、細長く刻んだたくわんを食べる。小豆粥の器にふーふー息を吹きかけて冷まし、小豆粥をかきこむ。

〈終〉

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい

47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円＋副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円＋月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆ 9月 四国地区の審査結果発表 ☆☆☆

審査経過

9月22日に締め切られた第8回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール（対象地区：四国地区）は、応募総数143編（愛媛県38編 香川県43編 徳島県21編 高知県37編 その他4編）を集めた。

その中から次の12編が最終審査に進んだ。

最終審査はシナリオ・センター出身で、香川県出身のシナリオライター浜田秀哉氏が行い、最優秀作1編が選出された。最優秀作1編が選出された。

審査結果発表

★9月の月間最優秀作

『正しい帽子パンの食べ方』

朱花かの子

●最終審査候補作品12編

（カッコ内は採り上げたごはん）

『出会い系？』（いもたき）

愛媛バリーコ

『じゃこじゃこ道中』（じゃこ天）

大谷内 伸

『美人井の隠れ味』（鯉の美人井）

小林 省三

『包んで隠して』（塩餡雑煮）

小峰 貴之

『戻り鰹』（鰹のたたき）

近藤 太一

『瀬戸内の雑魚』（じゃこ天）

田邊 考司

『正しい帽子パンの食べ方』（帽子パン）

朱花かの子

『いいとこ取りのイタドリ』（イタドリ）

水元久美子

『すだちのお酒』（すだち）

森 久里

『道端の鯛』（鯛）

森山 淳一

『連絡船うどん』（讃岐うどん）

山崎 幸子

『暁のマリンライナー』（骨付き鶏弁当）

大和谷 均

（以上五十音順 敬称略）

秀作を掲載すると共に、浜田氏の審査評も掲載する。

なお10月27日に締め切られた「東海地方」の審査（最終審査員は愛知県出身のいずみ吉紘氏）は12月22日発行の2018年1月号誌上で発表する。

最終審査評

「47行の物語・ごはん＆四国地区」

映像が浮かぶかどうか

浜田秀哉（シナリオライター）

47行って短い。

でも上位5本選ばせていただいた作品は、どれも47行とは思えないほど『巧み』な短編でした。

キャラクターの関係性や現状、心情が説明なく描き切れていました。その中でも受賞作は、さらに頭一つ飛び出た職人芸のような巧みさを感じました。

都会に出た主人公と、地方にいる父親と姉。主人公と姉のワンシーンの会話だけで描き切り、父親は登場しないところがミソ。登場しないけど、課題のごはん（＝小道具）を通して、主人公との関係性が見えてくる。姉がうまく父親と主人公を橋渡しするのもいい。画が浮かぶ。後味もすこぶるいい。

課題のごはん——それを最も上手く料理した作品だと思います。

最優秀賞以外の上位作品は、『美人井の隠れ味』『戻り鰹』『すだちのお酒』『包んで隠して』の4篇でした。

最優秀賞

正しい帽子パンの食べ方

はねず
朱花かの子

(作家集団K)



〈人物〉

西田耕太 (28) 会社員

西田由佳 (32) 保育士

看護師 (40)

○病院の入院患者用談話室

西田耕太 (28) が、座っている。西田

由佳 (32) が、ビニル袋を提げて入って来て、耕太の向かいに座る。

由佳「お父さんの検査、まだかかりそうや」

耕太、立ち上がりながら、

耕太「ほんなら、俺、帰るきよ」

由佳、慌てて耕太の腕をつかむ。

由佳「何言いゆうが。わざわざ大阪から、も
んて来たがやに」

耕太「危篤や言うきや。俺が来たこと、お姉
ちゃんから、言うちよって」

由佳「いやや、自分で言うたらええやいか」
耕太「俺の顔見たち、嬉しゅうもないろうき」

由佳「そんなこと、ないちや。ほら、座りや、
座りや。ええもん、買うて来ちゃったき」

耕太、ふて腐れた顔で座る。

由佳、ビニル袋から、缶コーヒート帽
子パンを出す。

耕太「目が輝く」 おお

由佳「大阪にはないがやろ、帽子パン」

耕太、帽子パンを手に取り眺める。

耕太「高知にしかないらしいぜ」

由佳「知らあったぜねえ」

耕太、帽子の鏝の部分で器用にかじる。

由佳「お父さん、偉そうにしゅうけど、ほん
とは、あんたのこと心配しゅうがぜ」

耕太「俺は、絶対、あんな自己ちゅうの男に
だけはなりとうないき」

由佳「ふうん」

耕太「なんぜ」

由佳「あんたの帽子パンの食べ方」

耕太「それが、どういた」

由佳「お父さんと、おんなじやき」

耕太「ほっちよけ」

由佳「その台詞も、おんなじ」

耕太「帽子パンは、縁が美味いがやき」

由佳「縁だけ食べて、真ん中残いて、お父さ
んに、間違うちゅうって、よう怒られよった」

悔しそうな表情の耕太、残りのパンを
口に突っ込み、喉に詰まらせる。

由佳「もう、それまでおんなじや」

看護師が、入り口から顔をのぞかせ、

看護師「西田さん。お父さん、お部屋に戻り
ましたよ」

由佳「あ、どうも。(耕太に) ほら、行くよ」

耕太、咳払いして立ち上がる。

〈終〉

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい

47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円＋副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円＋月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆ 10月 東海地区の審査結果発表 ☆☆☆

審査経過

昨年10月28日に締め切られた第9回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール」(対象地区：東海地区)は、応募総数158編(愛知県62編 静岡県47編 三重県14編 岐阜県14編 不明22編)を集めた。

その中から次の12編が最終審査に進んだ。

最終審査はシナリオ・センター出身で、愛知県出身のシナリオライターいずみ吉紘氏が行い、最優秀作1編が選出された。最優秀作を掲載すると共に、いずみ吉紘氏の

審査結果発表

★10月の月間最優秀作

『似たもの同士』

萩原幸子

●最終審査候補作品12編

(カッコ内は採り上げたごはん)

『俺たち、沼津っ子』(生しらす井 蒼太れいじ)

『塩の果実』(メロンの漬け物) 小口 佳月

『こみ上がるモノを呑み込んで』(あまご茶漬) 落合香緒里

『春のひじき』(生ひじき) 加藤 涼子

『ふわふわ優しい伊勢うどん』(伊勢うどん) 栗山 恵子

『ヤクザと味噌カツ』(味噌カツ) 鹿野 純一

『ひつまぶしな愛』(ひつまぶし) 杉田 鮎美

『似たもの同士』(どて煮) 萩原 幸子

『グリーングリーン』(蜜柑飯) 美 苗

『ホオノキの思い出』(朴葉味噌) 山田 圭奈

『小倉トーストな2人』(小倉トースト) 山久 友

『最後の晚餐』(味噌煮込みうどん) 藁品 優子

(以上五十音順 敬称略)

審査評も掲載する。

なお昨年11月25日に締め切られた「関東地区」の審査(最終審査員は出身の荒井修子氏)は1月28日発行の2018年2月号誌上で発表する。

最終審査評

「47行の物語・ごはん&東海地区」

キャラクターが活き活き

いずみ吉紘(シナリオライター)

読ませていただいた作品の傾向として、登場人物が感傷にふける作品が多い中、『似たもの同士』はお互いに一歩も譲らない嫁姑の人物像、さらに姑の包容力が嫁を味方につけていくというオチまで、キャラクターが活き活きしていて最も印象に残りました。役者さんが演じてみたくなるキャラクターやシーンに仕上がっていると思います。

『ホオノキの思い出』は感情があまり表には出て来ないものの、朴葉味噌を食べてみたくなる、いいCMを見ているような気分になさてくれる作品でした。『春のひじき』は機転のきく民宿の女将さんのキャラクターがよく、彼女の心情をもう一歩踏み込んで描くとさらにいきてくると思いました。

無骨な職人肌の水産業者を描いた『こみ上がるモノを呑み込んで』も地に足がついた人物がしっかりと描かれていましたし、『最後の晚餐』は夫婦の間に何があったのか前後のシーンがとても気になり、両作品ともあと一歩踏み込んで描くと、作品として完成されると思いました。

最優秀賞

似たもの同士

萩原幸子

(作家集団F)



〈人物〉

伊藤裕美子(56) 専業主婦

伊藤佳乃(29) 裕美子の息子の嫁

伊藤 一(29) 裕美子の息子、佳乃の夫

○伊藤家・台所

伊藤裕美子(56)と伊藤佳乃(29)、料理をしている。

鍋の中は味噌を煮込んでいる。

裕美子「どて煮には八丁味噌。他の、安いのがダメよ」

佳乃「はい……」

佳乃の足下には半額シールの貼ってある新しい味噌のパックがビニール袋に入っている。

佳乃は足でそれをそつと隅に隠す。

裕美子「一も小さい頃からこれが好きでね。」

佳乃さんにもちゃんとしたのを覚えて欲しいのよ」

裕美子は茹でてある豚肉を鍋に入れる。

佳乃「豚肉なんですわね。この方が安上がりかも。実家では牛すじでしたから」

裕美子「あ、そう……」

佳乃が鍋にきざんだ大根や人参、こんにゃくを入れようとすると、

裕美子「そんなにいろいろ入れたら、味が変わっちゃうわよ」

佳乃「一さんはこの方が美味しいって言っていましたよ」

佳乃はすばやく材料を鍋に入れてふたをする。

二人、黙ってにらみ合う。

伊藤の声「美味そうだな」

伊藤一(29)が顔を出す。

裕美子と佳乃は笑顔で返事をする。

佳乃「一さん、お義母さんが美味しい作り方を教えてくれるのよ」

裕美子「私が教えることなんてほとんどないわよ」

伊藤「うちは嫁姑、仲良くてよかったなあ」

伊藤は機嫌よく去っていく。

すぐに裕美子と佳乃から笑顔が消える。

佳乃、ため息をつく。

裕美子「父親そっくり。似たような嫁を選ぶところも」

佳乃「似た者同士……」

裕美子、鍋の中身をかきまぜる。

裕美子「たまには安い味噌でも良いかもね」

裕美子、佳乃の足下のビニール袋を見える。佳乃、べろっと舌を出す。

佳乃「豚も良いですよ。たまには」

裕美子「煮ちゃえば一緒なもの」

二人、くすつと笑い合う。

〈終〉

シナリオ・センター創立47周年47リオの年記念
日本中の人にシナリオを書いてもらいたい

47行の物語

シナリオの年

TH

～47都道府県シナリオコンクール～

「ごはん」×地域で、47行の物語を紡げ！

- ・年間最優秀「47行の物語」賞 47,000円＋副賞
- ・月間最優秀作品 4,700円＋月刊シナリオ教室掲載
- ・月間最優秀作品の審査は、各地区代表の出身ライター

☆☆☆ 11月 関東地区の審査結果発表 ☆☆☆

審査経過

11月25日に締め切られた第10回「47行の物語」47都道府県シナリオコンクール（対象地区：東京を除く関東地区）は、応募総数116編（神奈川県33編 千葉県19編 埼玉県17編 茨城県15編 群馬県15編 栃木県13編 不明3編 除外1編）を集めた。

その中から次の12編が最終審査に進んだ。

最終審査はシナリオ・センター出身で、千葉県出身のシナリオライター荒井修子氏が行

審査結果発表

★11月の月間最優秀作

『抑えきれない郷土愛』

●最終審査候補作品12編

西出拓也

（カッコ内は採り上げたごはん）

『房の秋』（ゆで落花生）

蒼太れいじ

『肉まん！』（肉まん）

愛知 恋

『落花生』（落花生）

飯塚さゆり

『埼玉のうどん』（うどん）

石川理映子

『暑中、私を伺って』（耳うどん）

上西 利明

『男の朝飯』（蕨納豆）

鬼武 桂子

『ここにしかないもの』（モツ煮 潮楼 奈和

『半ドンの日のためこそんべい』（たこせんべい）

望 望

『変わらぬ味』（ひもかわうどんとおやき）

田中 理恵

『抑えきれない郷土愛』（宇都宮餃子）

西出 拓也

『ただいま』（餃子ドッグ）

大和谷 均

『焼きまんじゅう殺人事件』（焼きまんじゅう）

吉野 治

（以上五十音順 敬称略）

最終審査評

い、最優秀作1編が選出された。最優秀作を掲載すると共に、荒井修子氏の審査評も掲載する。今回の10回目でコンクールは終了だが、年間最優秀作品を表彰するイベントが開催される予定。詳細が決まり次第お知らせする。

「47行の物語：ごはん&関東地区」
歯切れ良いセリフと掛け合いの面白さ

荒井修子（シナリオライター）

「ごはん＋地域ならではの特性」が生かされていた。題材を宇都宮餃子にしたこともわかりやすく、宇都宮の男が自分は東京寄りで友人の郡山の男を田舎者扱いしているところなども面白みが出ていた。

宇都宮の男は自分は郷土愛などないとしながら、つい餃子の食べ方に拘ったり、隠しているが浜松餃子と張り合っていたりして、ちゃんとオチもついていた。文字数に限りがあるため、他作品が情景や感情を直接的に伝えようとセリフが説明的であつたり、短い中にストーリーを作ろうとして言葉足らずになる傾向にある中、シーンの要点を絞って歯切れ良いセリフで端的に郷土愛を示した手法が良かった。掛け合いの面白さも作れていた。宇都宮に愛着なんかないとしながらもしっかりと愛着を持っている様が描かれ、キャラクターに人間味を感じた。

上位に挙げた作品は2位以下『変わらぬ味』田中理恵さん、『ここにしかないもの』潮楼奈和さん、『落花生』飯塚さゆりさん、『房の秋』蒼太れいじさんである。

最優秀賞

抑えきれない郷土愛

西出拓也

(研修科Z R)



〈人物〉

杉山 剛(30) 会社員・宇都宮出身

鈴木 絃一(30) 杉山の友人

○餃子のみんな・中

お客さんで満席の店内。店員が慌ただしく餃子を運んでいる。

杉山剛(30)と鈴木絃一(30)がカウンターに座り、餃子を待っている。

杉山「何年ぶりかねえ。なに? 出張?」

鈴木「明日東京でさ。通り道だしちょうどいいやと思って」

杉山「サシ飲みは学生以来か。郡山寒いだろ」

鈴木「いや、宇都宮とそんなに変わらないよ」

杉山の表情が一瞬変わる。

杉山「そんなことないだろう。宇都宮は関東だからな。天気も関東の予報見るし。なんだかみんな東京向いてんだよ」

鈴木「へえ、なら東京に通ってる人もいるの?」

杉山「いるいる! 沢山いるよ。まあちょっと遠いけど東京のベッドタウンみたいなもんかね。その代わり、地元に興味ない人が多いんだわ」

鈴木「ああ、昼間県外でちゃうから? せっかく餃子とか有名な物あるのにな」

杉山「まあ俺も宇都宮になんの愛着もないんだけどね。正直餃子にも何も感じないし」

店員が餃子を運んでくる。鈴木が小皿に醤油と酢を入れ、酢のピンを戻そうとすると、杉山が鈴木の手を止める。

鈴木「え? なに?」

杉山「ちょっと待って。今どれ位入れた?」

鈴木「酢だよ。少ないだろ。基本は73だよ。ななさん」

鈴木「ななさんくらいだけど……」

杉山「違うよ、酢が7、醤油が3だよ」

鈴木の小皿に酢を足す杉山。

杉山は満足げな表情で、鈴木に食べるように促し、2人で食べ始める。

鈴木「うまい! やっぱ本場は違うな」

杉山「そうか? そんな感じたことないけどな」

鈴木「この前さ、出張で浜松行っただけど」

浜松と聞いた瞬間に箸が止まる杉山。

鈴木「あそこの餃子も美味かったわ!」

杉山「は、浜松も餃子が有名なんだっけ?」

餃子を一口で食べる杉山。

鈴木「あれ? 知らないの? いつも宇都宮と浜松で日本一を争っているじゃん」

鈴木「へえ、たかが餃子で意味分かんないな」

鈴木が餃子を箸で掴み、両面を見る。

鈴木「浜松の餃子はもうちょっと……」

杉山「両面焼くのは餃子とは言えんだろ」

月間最優秀賞をお読みいただき、ありがとうございます。

年間最優秀作品を1作品お選びください。Web 及び投票箱にて投票できます。

投票は、**3/31（土）～4/7（土）20時まで**となります。

投票はこちらから <https://goo.gl/forms/Ag48BbVHG0kNV0M62>

（3/31以降、Google の投稿フォームに遷移します）

2 月月間最優秀作 『あご出汁の味噌汁』小檜山 長代（対象地区：九州・沖縄）

3 月月間最優秀作 『はれの日の朝』有坂 尚子（対象地区：東北）

4 月月間最優秀作 『マモル』山下エリカ（対象地区：東京）

5 月月間最優秀賞 『かかの醤油おこわ』田中理恵（対象地区：北陸・甲信越）

6 月月間最優秀賞 『ふくの料理』横内 治（対象地区：中国地方）

7 月月間最優秀賞 『酪農一家のイクラ丼』三浦優子（対象地区：北海道）

8 月月間最優秀賞 『小正月』北辻 類（対象地区：近畿）

9 月月間最優秀賞 『正しい帽子パンの食べ方』朱花かの子さん（対象地区：四国）

10 月月間最優秀賞 『似たもの同士』萩原幸子さん（対象地区：東海）

11 月月間最優秀賞 『抑えきれない郷土愛』西出拓也（対象地区：関東 東京を除く）

【年間最優秀賞 決定イベント開催！】

各月の審査委員の方々をゲストに 4/13（金）LOFT9 Shibuya にて、

『シナリオ熟』開催！詳細は、下記 URL からご確認ください。

イベント詳細：<http://www.scenario.co.jp/online/21225/>

